

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

チェルノブイリ30年一原発事故後の放射線健康影響
問題の歴史と現在一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柿原, 泰, 今中, 哲二, 尾松, 亮, 山内, 知也, 吉田, 由布子 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/1283

チェルノブイリ 30 年

—原発事故後の放射線健康影響問題の歴史と現在—

2016 年 5 月 29 日 (日) 15 時 40 分～18 時 10 分

於：工学院大学（新宿駅西口より徒歩 5 分）11 階 F 会場 1161 教室

1986 年のチェルノブイリ原発事故の発生から 30 年、本シンポジウムでは、チェルノブイリ原発事故がもたらした放射線健康影響問題に対する科学者・医学者らの取り組み、国内外の諸機関による被害調査、政府等の社会制度的対応などについて歴史的に振り返り、また、東電福島原発事故の後、しばしば比較の対象として言及されるチェルノブイリの被害・影響などに関するデータや経験の参照のされ方の問題点について検討します。チェルノブイリの歴史的教訓とは何か、どのような示唆を得るべきなのか、議論したいと思います。

シンポジウム・プログラム

15:40～ 趣旨説明（柿原泰）

15:45～ 今中 哲二（京都大学原子炉実験所）

チェルノブイリ原発事故と福島原発事故：事故プロセスと放射能汚染等の比較検討

16:15～ 尾松 亮（関西学院大学災害復興制度研究所）

2014 年末以降の「チェルノブイリ法」改正における「被災地」ステータスの変化
—変えられたものと「変ええない」もの—

16:45～ 山内 知也（神戸大学）

東京電力福島第一原発事故による小児甲状腺がんの多発

17:05～ 吉田 由布子（「チェルノブイリ被害調査・救援」女性ネットワーク）

チェルノブイリ大惨事健康影響評価：国際機関と被災国科学者

17:25～ 柿原 泰（東京海洋大学）

チェルノブイリ汚染地域住民に対するエートス・プロジェクトの問題点

17:40～18:10 コメント（藤岡毅）、質疑応答、総合討論

シンポジウム当日のプレゼンテーション資料を以下に掲載します。

『日本科学史学会 第 63 回年会 研究発表講演要旨集』（2016 年 5 月）、100-105 ページも参照されたい。また、より詳しい内容については、日本科学史学会『科学史研究』誌に本シンポジウムの内容を含んだ論考が掲載される予定です。ご参照いただければ幸いです。（柿原泰）

日本科学史学会 第63回 年会 シンポジウム

チェルノブイリ30年

～原発事故後の放射線健康影響問題 の歴史と現在～

コーディネーター 柿原 泰(東京海洋大学)

シンポジウム・プログラム

- 今中 哲二（京都大学原子炉実験所）

「チェルノブイリ原発事故と福島原発事故：事故プロセスと放射能汚染等の比較検討」

- 尾松 亮（関西学院大学災害復興研究所）

「2014年以降の「チェルノブイリ法」改正における「被災地」ステータスの変化 —変えられたものと「変ええない」もの」

- 山内 知也（神戸大学）

「東京電力福島第一原発事故による小児甲状腺がんの多発」

- 吉田 由布子（「チェルノブイリ被害調査・救援」女性ネットワーク）

「チェルノブイリ大惨事健康影響評価：国際機関と被災国科学者」

- 柿原 泰（東京海洋大学）

「チェルノブイリ汚染地域住民に対するエートス・プロジェクトの問題点」

- コメント 藤岡 毅（同志社大学）

シンポジウムの趣旨

- 1986年のチェルノブイリ原子力発電所事故(大惨事)から30年
- 2011年の東京電力福島第一原子力発電所事故(原発震災)から5年

福島県「県民健康(管理)調査」(福島県立医科大学)

甲状腺検査: 小児甲状腺がん多発状況

← ところが、「多発」であるとされない、「原発事故による放射線被曝の影響」とは考えにくい、などとされ続けている

他県での健康調査は？

避難・移住 ↔ 帰還

チェルノブイリでは？

チェルノブイリの経験やデータの参照のされ方

- 事故プロセス、放射能汚染の状況、被曝影響など、チェルノブイリと福島と比較検討
← 今中報告
- 1991年チェルノブイリ法 政府の対応は？
2014年以降の変化は？
← 尾松報告
- 福島県「県民健康調査」における小児甲状腺がん多発状況の分析、被ばく線量推定の問題点など
← 山内報告
- チェルノブイリの健康影響に関する国際機関の報告、被災国の科学者からの批判・反論
← 吉田報告
- チェルノブイリ汚染地域住民に対するアプローチの問題点
← 柿原報告

開催までの経緯

- 日本科学史学会 第61回年会・シンポジウム「新たな『放射線安全神話』～今、歴史から何を学ぶべきか？」(2014年5月) → 『科学史研究』第53巻通巻272号 (2015年1月) に掲載
- 日本科学史学会・西日本研究大会／生物学史分科会など共催シンポジウム「放射線の健康影響問題を歴史学の観点から捉え直す」(2014年12月) → 『生物学史研究』No. 75 (2015年12月) に掲載
- 日本科学史学会 第62回年会・シンポジウム「原発事故後の放射線健康影響問題～福島県での小児甲状腺がん多発とチェルノブイリの歴史的教訓」(2015年5月)

昨年(2015年5月)のシンポジウム・プログラム

- 柿原 泰(東京海洋大学)「序論」
- 吉田 由布子(「チェルノブイリ被害調査・救援」女性ネットワーク)
「チェルノブイリ原発事故による健康影響を巡る29年の歴史を概観する」
← 小児甲状腺がんに限らないさまざまな健康影響
- 山内 知也(神戸大学)
「東京電力福島第一原発事故後に福島県内で多発している小児甲状腺がんの特徴」
← 福島県では小児甲状腺がんは多発状況
- 瀬川 嘉之(高木学校)
「UNSCEAR(国連科学委員会)2013年報告書の評価について ～子どもに対する甲状腺吸収線量評価を中心に～」
← 福島の被ばく線量はチェルノブイリより低いのか？
- 藤岡 毅(同志社大学)
「被害の実相を直視しない線量至上主義は、現代版ルイセンコ主義である」
- コメント 塚原 東吾(神戸大学)／瀬戸口 明久(京都大学)

チェルノブイリの経験やデータの参照のされ方

- 事故プロセス、放射能汚染の状況、被曝影響など、チェルノブイリと福島と比較検討
← 今中報告
- 1991年チェルノブイリ法 政府の対応は？
2014年以降の変化は？
← 尾松報告
- 福島県「県民健康調査」における小児甲状腺がん多発状況の分析、被ばく線量推定の問題点など
← 山内報告
- チェルノブイリの健康影響に関する国際機関の報告、被災国の科学者からの批判・反論
← 吉田報告
- チェルノブイリ汚染地域住民に対するアプローチの問題点
← 柿原報告

2016年度～

- 科研費 基盤B「放射線影響研究と防護基準策定に関する科学史的研究」16H03092(代表・柿原泰)

